巻頭座談会

郊外の新しい可能性を引き出せ

重松　清 作家

炭谷晃男 大妻女子大学社会情報学部教授

司会
㈱ニッセイ基礎研究所社会研究部門主任研究員 土堤内昭雄

居住者の高齢化を初め、「郊外」のニュータウンは様々な課題に直面している。
今「郊外」のニュータウンで何が課題になっているのか？
その再生と復権のために必要な条件とは何か？
デベロッパーはいかに関わるべきか？
「郊外」に詳しい方々に語っていただいた。

それぞれの郊外体験は？

土堤内　まず、皆さんと郊外の関わりについて、お話いただきたいと思います。

私自身は、有楽町の会社で15年働いていますが、この間、今住んでいる「千葉・幕張ベイタウン」を含めてずっと郊外暮らしでした。「幕張ベイタウン」に転居したのは7年前。子どもが小学校の3年生と4年生になった時で、教育環境が良く安心して子どもを育てられる所はないかと探していました。ここには、千葉市立打瀬小学校という非常にユニークな公立学校があったことと、私自身が建築や都市計画の仕事をやっていて、その面から見ても面白い試みをいろいろやっている。従来の自分の仕事の立場を離れて、ひとりの住民になってここの街づくりに参加したい、内側から街づくりを見てみたいという思いで引っ越しました。その後郊外の生活をエンジョイしています。

重松　私は1963年生まれで、まさに団地っ子世代。父親の勤めの関係で転勤が続き、下町や工業地帯などニュータウンとは縁遠い土地ばかりに住んでいましたが、白い団地の建物が丘の上に広がる光景にものすごく憧れました。その憧れが東京に出てきてからニュータウンに移り住み、住み続けた背景になっているようです。

それで、この3月まで八王子のニュータウンに11年間住み、ここで3回引っ越しています。最初は一軒家を借り、その後、価格も下げ止まりかなと思い、駅前のマンションを買い、さらに一戸建てに買い替えて住んでいました。

八王子に移る前は多摩センターで塾の先生をしていましたが、その頃の多摩ニュータウンは子どもがわんさとあふれ、最後の「オンナ・コドモの街」というニュアンスがすごくあり、ニュータウンの原風景のようなものがありましたね。

土堤内　多摩ニュータウン学会を主宰されている炭谷さんは、郊外とどんな関わりをお持ちですか？

炭谷　私が育ったのは、東横線で多摩川を一つ渡った川崎市の新丸子という所です。それは昭和30年代で、休日になると、父親に渋谷の東急文化会館に連れられて行き、昼はパンテオンで映画を見て、シブショク（渋谷食堂）で食事をして帰るという高度成長期の私鉄沿線の家族の典型のような姿でした。

その後、大学に職を得て、青森県の大学にいました。そこで7年間ほど暮らしましたが、東京に負けまいとして地域の人たちが頑張っている姿を見て、東京に戻ったら、実際に地域づくりに関わりたいなと望んでいました。

多摩ニュータウンの中にある大妻女子大学に職を得て、東京に戻ることになり、それなら多摩ニュータウンに住んでみよう。実際にこの街を内側から見よう。それも第三者的に見るのではなく、自らも何か実践してみたいという気持ちで、多摩ニュータウンに住みました。

終身雇用・年功序列の日本型経営で裏打ちされていた我が国のニュータウン

土堤内　郊外問題を読み解くために、郊外という空間をどうとらえるべきか、議論を進めたいと思います。

わが国では60年代以降、高度経済成長期に急速に大都市圏に集まってくる人口の受け皿として郊外に大規模なニュータウン開発が行われてきました。そこでは勤労者とそれを支える専業主婦、そして子どもという、いわゆる近代家族モデルがベースになり、ニュータウンの居住を成立させました。しかし、日本のニュータウンは、業務機能を大幅に取り入れているアメリカやヨーロッパのニュータウンとは違って、ベッドタウンと別称されるように、住む機能を中心に成長していきました。これは日本の郊外空間の第1の特徴といっていいと思います。

第2の特徴は、当時の企業が終身雇用と年功序列という日本型経営だったこと。終身雇用により長期の住宅ローンが組める。また年功序列は年齢と所得がリンクして、ニュータウンのある一定の区画を同世代が買うという形になります。だから、同じ年齢層が集まって住むという構造ができあがりました。今、ニュータウンが抱えている問題の根本はそこにあります。子どもがドッと増えるときは、小学校が沢山必要になるし、高齢化すると小学校がいらなくなり統廃合が起きて高齢者施設が不足する。世代の偏りが大きな課題になっています。

同じ場所に同じ年齢層が集まるという構造になっていて、ニュータウンが抱えている問題の根本はそこにあります。

さらに、核家族という近代家族がベースになっているために非常に画一的なライフスタイルや価値観が街全体を支配していることも郊外の課題を解く大前提になっているのではないかと思います。

重松　八王子に私が引っ越したのは92年でしたが、その年に幼稚園が1つなくなり、日帰りの老人デイホームがオープンし、次第に老人の街としての体裁を整えるような感じになりましたね。

日本型経営の話が出ましたが、90年代にニュータウンの家を買った者としての実感からいえば、社内融資を使った人は少ないと思います。会社の住宅ローンを借りてしまうと、一生ヤバイぞという感じ。これは転職ぶくみの反映かもしれませんが。

その代わり、住宅金融公庫の利用が多くなって、その利率が話題になったりしています。会社のローンを背負いたくないから、住宅金融公庫から目一杯借りるという感じが私たちの世代、40歳前後の家の買い方ではないかと思います。

ニュータウンでリアルなのは、家を値段で換算できてしまうことですね。同じ街でも駅から徒歩圏内とバスに乗っていくのでは歴然と違う。「頭金があと500万円あったら、この街区に住めたのに、その金がないからこの街区に住むしかなかった」という思いからは、その街への愛着も生

ニュータウンでリアルなのは、家を値段で換算できてしまうことですね。
変な損得勘定が細かな差異として現れるのが私たちの世代のニュータウン観です。

この座談会で、しばしば話題になった重松清作『定年ゴジラ』（講談社文庫）。25年前に買ったニュータウンの家に住み、ついに定年を迎えた主人公の山崎さんが、同じ街で暮らす定年仲間とともに送る哀歓の日々を描いた。

重松　清（しげまつ・きよし）
1963年、岡山県生まれ。早稲田大学教育学部卒業。91年、『ビフォア・ラン』で作家デビュー。99年、『ナイフ』で坪田譲治文学賞、01年、『ビタミンF』で直木賞受賞。著書に『定年ゴジラ』『見張り搭からずっと』『舞姫通信』『幼な子われらに生まれ』『半パン・デイズ』『日曜日の夕刊』『カカシの夏休み』『隣人』など。時代を等身大でとらえた作品を次々に発表。

まれにくいですね。変な損得勘定が細かな差異として現れるのが私の世代のニュータウン観です。

同じ階層と年齢層が集中

土堤内　重松さんがお書きになった『定年ゴジラ』に一戸建ての住宅地にマンションが建つ計画を知った時の住民の反応として「マンションが建つと、陽当たりが悪くなるし、住民の生活レベルが揃わない。要するに一戸建ての買えない層の人が住むようになるから嫌だって…」と描かれていますが、そういう意識がすごくありますか？

重松　児童公園にフィールドアスレチックの施設をつくろうとしたら、周りの小学生が遊びにくるからよくないと言う。すごく排他的な意識がありますね。自分の得た幸せを守り抜こうという意味では涙ぐましいほどの努力です。

だから民間の安いマンションが近くにポンとできたりすると、大変なことになる。自分の買った家、土地、街の既得権がどうしてあんなに強烈にあるのか。私みたいに転々と住まいを移り住んでいる者からすると何でこんなに必死に守るのか、不思議です。

炭谷　同じような階層で同じような年齢の人たちが同じような地区に集中的に住んでいるという構造になってくると、余計、ささいな差異化に目がいって、ちょっとした違いを非常に誇大化してとらえる。ないしは、その差を非常に既得権化して大切に守ろうとする。いい方向にいけば、地域のコミュニティの活性化に向かいますが、一つ間違うと、非常に排他的な住空間になってしまいますね。

土堤内　多摩ニュータウンでは、そのへんはどうですか。

炭谷　つい先ごろ、多摩市内の施設の統廃合問題で、統廃合施設を21世紀の多摩市の発展のために有効に使うべきだという市長あての答申を出したばかりですが、それらの施設は今までお年寄りたちが趣味や生き甲斐活動に使っているので、絶対に変えないでくれと猛烈な反対があったりします。

また、小学校のいろいろな施設を地域に開放してほしいと活動していますが、その小学校のPTAの人たちは、自分の子どもたち、自分の地域の子どもたちが使うのはいいけど、他から来るのは困ると考える人もいるようです。

学校は税金で建てられていて、そこに通っていない人たちもその税金を払っているわけですから使ってもいいはずですが、自分たちの資産と勘違いしている。

重松　近くに斎場ができた時、宮つきの霊柩車然とした霊柩車が通るのは駄目で、ライトバン型ならいいと言う。ニュータウンの街全体が部屋化しているというか、自分の気に入ったものだけでそろえていく感じがすごくします。

自分の意に沿わないものを受け入れるような文化や余裕がない。これだけのお金を出してこんなに沢山のローンを組んで買ったのに、この住環境が乱されるのはけしからんという一種の損得に還元されてしまう発想が相当根強いですね。

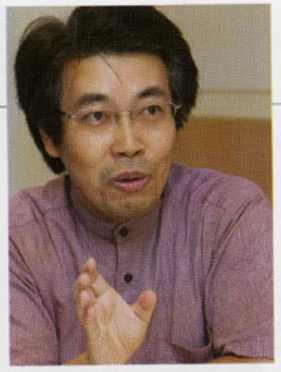
都心回帰は郊外逃避？

土堤内　再度、重松さんの『定年ゴジラ』を引用しますが、「分譲時期が早く、そのぶん住民の平均年齢も高い一丁目には、雪かきの不十分な通りが何本もある。雪かきは意外に重労働である。雪がきれいに消えているのは二世帯住宅の前、そうでないところは老夫婦だけの世帯。感心するほど画然と分かれている。街はこんなふうに老いていき、代替わりしていくのだと、まだらに解け残った雪が無言で教えてくれる」と書かれています。

私はこの一節が、今のニュータウンのいろいろな課題を凝縮していると思います。

重松　自分の敷地のところで線を引いて、ここまで完全にやるけどもそこからははみ出さない。お隣さんのところまでやってしまおうとするには、働き手が少なすぎる。普通のお父さんが会社に行ってしまった後、奥さんだけではやるのは無理ですね。

私が引っ越してきた90年代初頭に



同じ階層・同じ年齢の人たちが集中的に住む構造になると、
ささいな差異に目がいき、間違うと排他的な住空間になってしまいます。

はちょうどニュータウンの最初の居住者の家が築30年になって、建替えが始まり、ほとんどの家が二世帯住宅に生まれ変わりました。ところが、96、97年頃の建替え物件を見ていると、二世帯住宅はもうない。都心に買えるようになったので、無理して郊外に住むことはないやと息子たちは出ていく。だから今、二世代住宅の中古物件が大量に出ています。

炭谷　ニュータウン双六というのがあって、最初は公団の賃貸に入る。それから公団のマンション分譲に入る。それからあこがれの一戸建てに入って上がり。公団は、いずれは街全体として世代的に平均化すると考えたようですが、バブル崩壊でそれが一挙に崩れてしまった。都心で3000万円の物件が手に入るようになってしまったのに、郊外で新規に売られる公団住宅は6000万円という高値のものもある。しかし、実際は7割の値引きで売らなければ都心の物件とは競争できない。その7割というのは一体何だったのかと、住んでいる人は自問自答しているのではないでしょうか。

土堤内　都心物件の価格低下が都心回帰を招いた要素の1つだったかもしれませんが、少子化が進んで男性も女性も働こうとなれば、職住の近接性とか、子育てをはじめ生活を支援するいろいろなサービス機能のインフラがないと生活できない。その点で都心にはそのような条件がそろった物件が出てきたために、回帰現象が起こってきたのではないかと思います。

重松　いや、現実はもっと切実で、都心回帰というより郊外逃避とでも呼んだ方がいいかもしれません。これから店もどんどんなくなる。学校もどんどん閉校する。空き家は増える。老夫婦にとって病院も遠い。車がなければ生活ができない。郊外やニュータウンのインフラ部分の悪化への危機感が相当あるのではないでしょうか。

炭谷　汐留の再開発とか、いろいろなところで再開発が行われていますが、それは逆にいうと都心の中にニュータウンがつくられているようなものと考えてもいい。理想とした職住近接が郊外では実現できなかったけど、都心には公共インフラが整っているし、周辺にはエンターティンメント施設がある。郊外で成立しなかったニュータウンが、今、都心内部に成立していると私は見ています。

定年を迎えた団塊の世代は、その後も住み続けるか？

重松　多摩地域のニュータウンを見ていると、坂道の影響がすごくあると思います。肉体の老いに対応していない。『定年ゴジラ』でも書きましたが、ひな壇の家の玄関前の石段だけでもおばあちゃんにはきついんです。それでスロープにしようと思ったら、急坂になってしまってやはり上がれない。

炭谷　ただ、ニュータウンの中でいろいろな意識調査をしてみると、23区内に行くのではなく、ニュータウンの中の新しいところに移りたいという意見が多いのも事実で、ニュータウンの居住性が高く評価されている面があります。今住んでいる家がマンションの5階建てでエレベーターがないからしんどい、どこかニュータウンの別のところに、便利な家があったら移り住みたいという方も多いようです。

土堤内　これからのニュータウンの姿を想像する時、一番のキーポイントは団塊の世代が一気に定年を迎えることではないでしょうか。彼らがニュータウン内の住み替えも含めて、残るのかどうか。ニュータウンの今後の有り様を決定的に変えてしまうのではないかという気がします。

炭谷　2000年から多摩ニュータウンで使える「COMO」と名づけた地域通貨を発行し、「パソコントラブルで困っている」「旅行に行くので猫をあずかってほしい」などというニーズに地域通貨を使い、助け合う仕組みを市民で運営しています。この

多摩ニュータウンで使われている地域通貨「COMO」。「自分でできること」と「自分にしてほしいこと」をつなげるのに役立つ。例えば、パソコントラブルで困っている人や、買い物のできないお年寄りなどは「COMO」を使って依頼する。

ニュータウンは一世代都市で、次の子どもたちは住まないという極論もありますが、同居はできないけど近居という新しい住まい方をしている人も多いですね。

炭谷晃男（すみたに・あきお）
1952年、東京都生まれ。中央大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程修了。93年、大妻女子大学社会情報学部に着任、現在に至る。日本社会情報学会事務局長。地域と情報との関わりについて調査・研究を行っている。「多摩ニュータウン学会」の創設に関わる。99年に多摩ニュータウンに関わる4市の市長サミットを実現。著書・論文：『日本のCATV』『離島とメディアの研究』『情報社会の現在』など。

都心回帰の動きがありますが、現実はもっと切実で、郊外逃避と呼んだ方がいいかもしれません。

会員になっているのは団塊の世代ないしは40代が圧倒的に多いですね。この現象を見ると、定年後の団塊の世代に期待が持てそうです。

土堤内　「COMO」を地域の農家や近隣の商店で流通させることをお考えですか。

炭谷　近隣の商店と連携して、買い物に行けないお年寄りには「COMO」を使って宅配してもらったり、労働力の必要な農家に「COMO」を使ってもらえたらと考えています。生産者や近隣の商店と住民をいかに結びつけるか、知恵を絞っているところです。

重松　知り合いの都立大学の先生は多摩ニュータウンにお住まいですが、定年になった時に備えて、少年サッカーのコーチをしているんですね。団塊の世代が一斉に定年になって、とりあえず街にいてくれるようになれば何かが変りそうです。

炭谷　彼らはニュータウンの第1次入居世代ですから、自分たちの手で街を築いてきたという自負心がありますので住み続ける人が多いと思います。

問題は団塊ジュニアの動きです。堺屋太一さんはニュータウンというのは一世代都市で、入居した人たちは住み続けるけど、次の子どもたちは住まない街だと極論しています。ただ、私が住んでいる周辺には、「実は近くに親が住んでいるんだ」とか、同居できない構造だけど、近居という新しい住まい方をしている人も多い。だから、ちょっと楽観的にみているところもあります。

土堤内　要は、郊外の新しい可能性をどうやって引き出し、ふるさとにしていくかということでしょうか。

重松　多摩そごうのオープンのときのうたい文句が「多摩で銀座を食べましょう」でしたね。それで銀座の老舗の店を引っ張ってきたりしましたが、それなら銀座に行けばいいんです。こういう発想を持っているうちはふるさとになりえないのではないかと思います。

炭谷　都心に依存する郊外という図式ですね。自律した都市という方向にいくべきです。都心に依存した利便性を追及していくことは、都心にかなわないといっているのに等しい。

ニュータウンがふるさとになるためには？

重松　八王子や多摩地域には大学が多いけど、大学と地域の活動がうまく結びつきませんか。

炭谷　今、試行中です。八王子には20幾つの大学、多摩ニュータウンの中にも5つの大学があります。多摩ニュータウン学会は、各大学の研究者をネットワーク化し、地域住民も巻き込んで、行政任せでなく、ニュータウンの良さや可能性を自分たちで調査し、単なるアカデミズムでなく実践をともなった活動をしていこうとしています。また、多摩地域の48大学で組織された「学術・文化・産業ネットワーク多摩」という活動も始まっています。

例えば、多摩市には統廃合された小中学校の跡地が6校あります。多摩ニュータウン学会では、その小中学校を卒業した子どもたちが、鮭の回遊のようにその場に戻ってくるような、ニュータウン内での新しいビジネスチャンスの魅力を発信する施設として活用しようと提案しています。第二の街づくりと言ってますが、そのために、統廃合して廃校になった学校とか、売れ残っている土地をいかに活用していくかが課題ではないかと思います。

重松　廃虚をつくってはまずいですね。

土堤内　過去に戻れるところをきちっとつくるのが、ニュータウンがふるさとたりうるのに重要な条件ですね。

重松　利潤追求で会社や店は撤退しますが、学校にはアイデンティティがあるだけに残してほしいですね。

炭谷　幼稚園、小学校、中学校と、自分の卒業したところのすべてがなくなっている子どももう出てきています。

重松　それは悲しむべきことですね。

一気に定年を迎える団塊の世代がその後、住み替えも含めて、残るのかどうかで、ニュータウンの今後の有り様が変わるのではないかと思います。

「クレヨンしんちゃん」の映画の中にもあったけど、昭和40年代や50年代の小学校をテーマパークみたいにしてしまったらどうでしょうか。人が集まると思いますよ。ところが、その時にその街がよそから人が入ってくるのを許すかどうか。この問題は、日本人の持っているエゴとか、幸せの定義みたいなものの縮図といっていいですね。

ただそこに住むだけでなく働く生活の場として民間がどういう知恵を出してくれるか期待したいですね。

炭谷　ニュータウンは、人が集中的にドッと集まったところなので、問題が極端に出やすい。他の街では微小に見えるところが、大きく現れてしまうんですね。

　それと、新住民とニュータウンができる前から住んでいる旧住民とのギャップがまだ残っています。昔から住んでいる人たちの力を新住民の中に一緒に溶け合わせることが必要です。そこで期待されるのが学校。親は新住民、旧住民と分かれていて行き来がありませんが、子どもたちは友だちです。学校を核とした活動というのは重要です。

重松　お父さんたちは駅と家を往復するので精いっぱい。駅の反対側のことなんて何も知らない。ところが子どもたちにはそんな境界はありません。だから、団塊ジュニアがしっかりとふるさと感を抱いてくれれば、何とかなるような気もします。ふるさとというと、私たちより上の世代には「ウサギ追いしかの山」という農村の田園風景だろうというステレオタイプが相当強烈にあり、団地の中にはふるさとがない、と簡単に言ってしまいますが、それは変えていった方がいい。懐かしい場所がふるさとでいいと私は思います。

セキュリティをどうするか？

土堤内　さっき申しましたが、私は小学校を核にした街づくりに魅かれて、幕張ベイタウンに引っ越しました。打瀬小学校では、バリアフリー教育をしていますが、それはクラスのバリアフリー、学年のバリアフリー、地域のバリアフリーなんですね。

　最近は異学年の子ども同士が遊ぶ機会があまりありませんが、打瀬小学校では週1回、マンション単位で1年生から6年生がグループをつくって給食を食べます。少子化で兄弟姉妹が少ない中でも異学年が交流することができ、これは学年のバリアフリーの一例です。

　地域のバリアフリーの例を1つあげれば、地域の人が学校のいろいろな行事に参加する仕組みがあります。かつては学校の運動会のお知らせが全部の住戸に入り、運動会で道具係をやりたいと紙に書いて出すと、学校からお知らせが来て、道具係を受け持つ。普通は学齢期の子どもがいなければ学校との関わりはほとんどありませんが、幕張ベイタウンでは、自分の子どもが学校に通っていなくても、学校に行く機会ができる。授業参観のお知らせもきました。

　あと、地域交流特別クラブというのがあって、住民が自分の特技を学校に登録すると、1学期間に1回授業に呼ばれ、例えば自分の子どもはいないけど、コンピュータの得意な若夫婦が子どもたちにコンピュータを教えにいくわけです。学校を核にしながら地域とのいろいろなコミュニケーションがとれる仕組みがそこにはあります。

重松　ただ、せっかくそういう動きがあっても、小学生をめぐる凶悪事件が起きると、揺れ戻しみたいな感じで学校を閉ざしてしまう。人が集まり、人が流れていく中で何らかのリスクや不都合は当然出てくる。リスクは不可欠だという前提で、オープンにしながら、安全を確保するという方法を皆で考えなければいけないのに、門を閉めちゃうという発想はどうかと思いますね。

土堤内　大阪・池田小学校の事件があったとき、打瀬小は外部から人が自由に入れるオープンスクールなの

計画しすぎる計画というのは絶対だめですね。遊びのスペースをどのくらい残しておけるか、それが一番大事だと思っています。

土堤内昭雄（どてうち・あきお）
1953年生まれ。77年、京都大学工学部建築系学科卒業後、㈱竹中工務店入社。84年、マサチューセッツ工科大学高等工学研究プログラム留学。88年、ニッセイ基礎研究所入社。現在、社会研究部門主任研究員。「少子高齢化と街づくり」を中心テーマに、NPOやコミュニティビジネス、地域通貨等の調査・研究を行っている。神奈川県住宅政策懇話会委員。論文等：『郊外居住と家族の変容』『コミュニティビジネスがもたらすスローライフ』『地域通貨とNPO活動』など。

で安全性が問題になりました。結局、校舎については管理用の入口をつくって入る人をチェックする。だけどグランドはオープンのままでとなりました。グランドに面して、マンションが何棟も建っていて、衆人環視と同じ状態ですので、住民自身で地域のセキュリティを守ろうということになりました。

重松　田舎の高校の名門校の野球部なんて、OBや関係のない町のおっさんがグラウンドの周りに集まって、用もないのに練習を見に来る。そんなふうに何時も何をやっているのかなとフラッと入っていけるような雰囲気を地域と学校がつくっていけば、大分変るでしょうね。

炭谷　人の往来がある、常に人の目があるということが最大の防犯であり、安心に結びつきます。学校も開かれ、街自体も何時も往来があるというのが重要ですね。

民間デベロッパーの役割は？

土堤内　重松さんの本の中で「後出しジャンケン」という話が出てきます。どんなに一生懸命計画を建ててニュータウンをつくっても、5年、10年経ち、社会経済環境が変化していくと、あそこが悪い、ここが悪いという課題が表面化してきて、それはまるで「後出しジャンケン」みたいだとお書きになっていますが、この話はこれからのニュータウンづくりで重要な課題ではないかと思います。いい街にするには、変化に対してどう適応させていくか、その仕組みをどうつくり込むかが重要だと思いますが、いかがでしょうか。

炭谷　一つは、作り込み過ぎないことですね。

重松　そのとおりです。

炭谷　後で手を加えられるようないい加減さというか、余地を作っておくことが必要じゃないでしょうか。

それと、デベロッパーとしての公団の時代は終わり、これからは民間デベロッパーの時代になりました。公団が撤退し、民間が主役になっていく時に、ただそこに住むだけでなく働く生活の場として民間がどういう知恵を出してくれるか期待したいですね。

重松　新築で家を買った時がベストで、あとはどんどん下がっていくという発想はそろそろ変えなければいけません。最近、いろいろなマンションの設計図を見ていると、メンテナンスやリフォームがしやすいように配管を工夫したりして、大分発想が変ってきたなと思います。同時に街自体もリニューアルしていかなければいけません。その時には、民間の柔軟さとフットワークがとても大事だと思います。

土堤内　私は建築とか都市計画を仕事にしているものですから、実は何でもきちんと計画したいという思いがあります。しかし、計画しすぎる計画というのは絶対だめですね。車のハンドルと一緒で遊び(redundancy)をいかに計画の中に取り込んでおくか。住んだ人たちが街づくりに関われる遊びのスペースをどのくらい残しておけるか、それが一番大事だと思っています。

それと郊外はどこも同じイメージがありますが、地域の個性をどこに求めるか。それは地域の文化かもしれないし、自然環境かもしれない。それらをもう一度見直して、大事にしていくのが本当のスローライフであり、これから必要なことではないでしょうか。

お二人がおっしゃるように公的セクターが主体になった時代は終わりました。街づくりにあたって、大きなインフラや枠組みは公的セクターがやるけれど、あとのいろいろな創意工夫は基本的に民間が背負っていかなければなりません。民間デベロッパーも、地域住民がコミュニティビジネスを起こしたり、街づくりのための地域活動を支援すべきではないでしょうか。

炭谷　街づくりではなくて、街使いが重要です。街をどう使っていくかというソフトの部分に目を向けるべきだと思います。自己実現できる街としてそこに何かいい仕組みが生まれていれば、住民が満足するはずです。歩いて何分のところに保育園や公園があるというハード面だけでなく、この街ではこういう活動が行われていることのほうが、その街の価値を高める時代が来ていると思います。

街もリニューアルしていかなければなりません。
そのときには民間の柔軟さと
フットワークがとても大事だと思います。

地域に解放された「打瀬小学校」